

令和 元年 6 月 12 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04420

研究課題名(和文) 言語活動から切り離さずに「表現の工夫」を扱うための日本語学・心理学の連携的研究

研究課題名(英文) Research of "the technique of expression" based on the language activity

研究代表者

岩男 考哲 (IWA0, Takanori)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30578274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主目的は、学校教育の現場で使用される教科書において「表現の工夫」とされる項目(比喩表現)の使用状況と、子どもたちの言語習得の状況との対応関係を探ることにあつた。まず、教科書の状況調査の結果、教科書における比喩表現は学年が上がるにつれ、具体的な事物を用いて例える表現から抽象的な事物を用いて例える表現へと推移していることを明らかにした。一方、子どもたちの言語習得の状況は、特に幼少期の子どもたちの言語使用において多くの場合、動作を伴うことを指摘した。つまり、幼児の言語使用は具体的であることを指摘したことになる。これは、上記の教科書の語彙の推移と子どもの言語使用とが一致していることを意味する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義としては、教科書において子どもたちが触れる言葉と実生活において用いる言葉との関係を明らかにしようとした点が挙げられる。教科書とは議論の余地もなく子どもたちが触れることになる言語資料だと言えるが、そこで触れる言葉と子どもたちが実生活において使用する言葉との関係を考察することは教材の在り方を問う1つの観点であつたと言える。

また、近年、言葉の教育としての国語科という観点の重要性が指摘されているが、本研究のような観点からの研究はまさに上記の国語科の在り方に資するものと言つことができよう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to compare metaphoric expressions used in Japanese textbooks with the situation of children's language use. First, as a result of the research of the textbook, it was clarified that the metaphorical expression of the textbook is transitioning from the expression which is illustrated using concrete things to the expression which is illustrated using abstract things as the grade goes up. Next, it was pointed out that children often used actions when using languages. In other words, it is pointed out that the use of children's language is limited to expressions that mean concrete things. This means that the transition of the vocabulary of the textbook corresponds to the situation of children's use of language.

研究分野：日本語学

キーワード：表現の工夫 国語教科書 語彙の推移

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

本研究開始にあたり注目したのは、『学習指導要領』と『小学校学習指導要領解説』に関する次の(ア)と(イ)であった。

(ア)『平成20年版学習指導要領』に「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」「(ウ) 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」という項目が挙げられている。

(小学校：第5学年及び第6学年)

(イ)『小学校学習指導要領解説』に(注：「表現の工夫」は)「今回の改訂で新設した事項である」「具体的な表現の工夫には、比喩や反復をはじめとして様々なものが考えられる。(中略)多様な文章に表れる様々な表現の工夫に気付いたり、自分の表現に活用したりするように指導することが大切である(下線は本研究の報告者によるものである)」といった指摘も見られる。

このように、(特に国語科において)「表現の工夫」に関する項目をどう扱うかという問いは1つの重要な課題となり得る。しかしそれにも関わらず、肝心の「表現の工夫」の具体的な扱い方に関する言及が上記資料内には見られないのである。このままでは「比喩は『～ような』でつなぐ表現だ」といった形式面での指導で終わってしまう危険性があると言っても過言ではあるまい。これでは、かつて学校文法が暗記科目になりさがってしまったことの二の舞となってしまう危険性すらあると言って良い。

そこで、本研究を申請するにあたり、本研究グループメンバーの間で上記「表現の工夫」を暗記項目で終わらせないために「言語活動とつながった『表現の工夫』の扱い方」を考察する必要があるとの結論に至った(なお、本研究では「表現の工夫」の中でも、特に使用頻度が高いと考えられる比喩表現に着手することにした)。

そして、「言語活動とつながる」ためにはまず、比喩に関しては読み書きの仕方や教科書に現れる比喩表現の実例を観察するだけでは充分ではなく、その比喩表現を理解・使用する子どもたちの言語使用の実態や発達状況との関係を踏まえて考察すべきだと考えた次第である。

## 2. 研究の目的

上記「1. 研究開始当初の背景」でも述べたように、教科書における「表現の工夫」の扱いについて議論するには、子どもたちの実際の言語使用(や習得)の実態と「表現の工夫」とを関連付けて考察する必要があるというのが本研究の前提にある。こうした問題意識に基づき、教科書における「表現の工夫」とされる項目(主に比喩表現を対象とする)の扱いの推移と、子どもたちの言語習得の状況との対応関係を探ることを本研究の主目的とし、研究を行うことにした。

## 3. 研究の方法

本研究は、以下の方法により行われた。

まず、国語教科書内において「表現の工夫」がどのように扱われているのかを知る必要がある。具体的には、学年を追うごとに、教科書で提示される「表現の工夫(主に比喩表現)」の使用例の質がどのように変化するか(あるいは、変化しないか)を知る必要がある。そこで、出版社毎に、国語教科書における比喩表現の推移を調査した。この教科書調査の結果と、子どもの言語使用状況の変化との対応関係を考察する必要が生じる(結果の概要については、「4. 研究成果」を参照)。

次に、子どもの言語使用の実態を調査した。実際に言語使用をはじめるときの子どもの発話場面の調査を行い、その言語使用は具体的にどのようなもので、どう変化するものであるのかを調査した。ここでは、言語表現のみならず、それに伴う動作も踏まえ観察を行った。「4. 研究成果」のところでも再び述べるが、言語使用を始める頃の子どもの言語使用に動作が伴うことが多い(これは調査の結果明らかになった点である)。

最後に、上記2点の結果を照らし合わせながら、教科書における表現の推移と子どもの言語使用の変化との対応関係について考察を行った。

## 4. 研究成果

本研究の主目的は、学校教育の現場で使用される教科書において「表現の工夫」とされる項目(比喩表現)の使用状況と、子どもたちの言語習得の状況との対応関係を探ることにあつた。

まず、教科書の状況調査の結果、教科書における比喩表現は学年が上がるにつれ、具体的な事物を用いて例える表現から抽象的な事物を用いて例える表現へと推移していることを明らかにした。比喩表現を「未知の事物を既知の事物(に関する知識)を用いて理解しようとする」という定義に基づいて捉えるならば、こうした推移は子どもたちの成長の過程に合致した妥当なものだと言える。

一方、子どもたちの言語使用・習得の状況調査においては、特に幼少期の子どもたちの言語使用において多くの場合、動作を伴うことを明らかにした。つまり、子どもは年齢が下がるほど、その言語使用は具体的であることを指摘したことになる。

これは、上記の教科書の語彙の推移と子どもの言語使用とが一致していることを意味する。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計12件)

- (1) 岩男考哲, 宮地弘一郎, 肢体不自由児の動詞の使用について, 日本語文学系国際學術研討會 持続可能な社会のための日本語教育と日本文化研究を 模索して 論文集 査読有, 2018, pp.226-232
  - (2) 岩男考哲, 宮地弘一郎, 日本の「国語」の教科書で提示される語彙に関する考察, 2017 中國文化大學日本語文学系国際學術研討會 日本に関する教育と研究: 文学・言語の多様性と多元化及び情報の分析と異文化接触 論文集, 査読有, 2017, pp.39-47
  - (3) 仲潔・岩男考哲, 中学校「国語」・「英語」教科書における「異文化間交流」像: 「コミュニケーション能力の育成」の前提を問う(その3), 社会言語学, 17, 査読有, 2017, pp.75-87
  - (4) 武部匡也, 岸田広平, 佐藤美幸, 高橋史, 佐藤寛, 子ども用怒り感情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 行動療法研究, 43-3, 査読有, 2017, pp.169-179
  - (5) 高山智史, 高橋史, 認知行動理論によるスポーツメンタルトレーニング技法の展望, スポーツ心理学研究, 44, 査読有, 2017, pp.93-103
  - (6) Takebe Masaya, Takahashi Fumito, Sato Hiroshi, The Effects of Anger Rumination and Cognitive Reappraisal on Anger-In and Anger-Control, Cognitive Therapy and Research, 41, 査読有, 2017, pp.654-661
  - (7) 高橋史, 価値の明確化を伴う行動活性化手続きの産後うつ症状改善効果 症例報告, 行動療法研究, 43, 査読有, 2017, pp.105-114
  - (8) 岩男考哲, 複合辞「という」との接続表現的用法について, 日本語文法, 査読有, 16-1, 2016, pp.71-79
  - (9) 岩男考哲, 国語教科書に現れる直喩表現に関する調査報告, 信大国語教育, 査読無, 25, 2015, pp.54-57.
  - (10) 岩男考哲, 引用形式が名詞句をつなぐ表現について 「という」「といった」「とかいう」について, 信州大学教育学部研究論集, 査読有, 9, 2015, pp.1-8
  - (11) 高橋史, 学校における認知行動療法の活用, 精神科, 査読有, 27-6, 2015, p.442-446
  - (12) 武部匡也・田原太郎・福田繭子・高橋史, 怒りの抑制に関するポジティブな信念と対処方法および社会的スキルの関連性, 認知療法研究, 査読有, 8, 2015, pp.116-123
- ### 〔学会発表〕(計9件)
- (1) 仲潔, 岩男考哲, 伊藤創, 日本語母語話者に期待されるコミュニケーション観 - 英語・国語・日本語教育の教科書分析を通して - 韓国語教育学会言語文化教育研究学会(日本)共同開催 2018年度第34回冬季国際學術大会, 2018
  - (2) Koichiro MIYAJI, Takanori IWAO 他, An attempt to assess the processing of verbs by the simultaneous measurements of ERPs and NIRS., the World Congress of International Organization of Psychophysiology 2018, 2018
  - (3) 岩男考哲, 「評価属性」をめぐって, 日本言語学会 157 回大会, 2018
  - (4) Takahashi Fumito, Effects of school-based Acceptance and Commitment Therapy on mental health and behavior problems in adolescents., 52nd Annual Convention of Association for Behavioral and Cognitive Therapies, Washington D.C., 2018
  - (5) 岩男考哲, 宮地弘一郎, 日本の「国語」の教科書で提示される語彙に関する考察, 2017 中國文化大學日本語文学系国際學術研討會, 2017
  - (6) 岩男考哲, 名詞述語文の「主観性」について, 関西言語学会 2017 年大会, 2017
  - (7) 岩男考哲, 仲潔, 生徒たちが教科書で触れる「異文化間交流」, 第六回日台アジア未来フォーラム「東アジアにおける知の交流 越境・記憶・共生」, 2016

( 8 ) 岩男考哲 , 日本語学の視点で国語教育を眺める , 中学校教育研究会 , 2015

( 9 ) 岩男考哲 , 日本の「国語教科書」で用いられる直喩表現の推移について , 2015 年台大日本語文創新国際学術検討会 , 2015

〔図書〕(計2件)

( 1 ) 福田嘉一郎・建石始・岩男考哲他 , くろしお出版 , 名詞類の文法 , 2016 , 239(185-202)

( 2 ) 石川信一・佐藤正二 [ 編著 ] , ミネルヴァ書房 , 臨床児童心理学 実証に基づく子ども支援のあり方 ( 「 第 7 章 子ども の ODD/CD 」 を 高橋史 が担当 ) 2015 , 328(189-215)

〔産業財産権〕

出願状況 ( 計 件 )

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年 :  
国内外の別 :

取得状況 ( 計 件 )

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年 :  
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名 : 高橋史

ローマ字氏名 : TAKAHASHI Fumito

所属研究機関名 : 信州大学

部局名 : 学術研究院教育学系

職名 : 准教授

研究者番号 ( 8 桁 ) : 80608026

### (2)研究協力者

研究協力者氏名 :

ローマ字氏名 :

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。